

ただいま

息子と父の往復書簡

アメリカ

留学中



北村 洋・崇郎

ただいまアメリカ^{けいゆうがくちゅう}留学中

1994 ©Hiroshi Kitamura, Takao Kitamura



著者との申し合わせにより検印廃止

1994年3月10日 第1刷発行

著者 ^{きたむら ひろし} 北村 洋
^{きたむらたか お} 北村崇郎

装幀者 本山吉晴

発行者 加瀬昌男

発行所 株式会社 草 思 社

〒150 東京都渋谷区神宮前4の26の26

電話 03(3470)6565 振替東京7-23552

本文、カバー印刷 錦明印刷㈱／製本 大口製本印刷㈱

Printed in Japan

ISBN4-7942-0545-7

¥1600-

「洋、これをまとめて本にしないかい」

一九九二年六月、僕がアメリカに留学して一年目の初夏、鎌倉の家に帰ったとき、父からそういわれて、いきなり厚いファイルが目の前に差し出された。それは僕が父に出した手紙と、その返事であった。父の手紙はすべてコピーである。

僕は慶応大学の環境情報学部二年のとき、一大決心をしてアメリカに渡った。アメリカの大学では、僕はいやおうなく一つ一つのことがらについて自分で考え、自分で決断しなければならなかった。そして、この考えは自分のノートに書き綴っておくだけでもよかったが、誰かに聞いてもらいたかった。それで手紙の形式をかりて、自分の考えたこと、感じたこと、あるいは疑問

に思ったことを父に書き送ったのである。それは自分の考えをまとめるためでもあったし、四〇

年近く前にアメリカに留学した父の意見を聞くためでもあった。

その私信を公表するというのがのである。僕の幼い日々のことを両親が書いた『ヒロシ、君に英語とスペイン語をあげるよ』を出版してくれた草思社でも、一人の若者の成長記録としてとても面白いといってくれているという。僕はちよつと恥ずかしい気がしたが、同意してしまった。

アメリカに留学することを決断してから、しばらくは不安な日々が続いた。甘えん坊で意志の弱い僕は、日本を離れてやっていく自信がなかったし、「慶応を辞めるなんてもつたいない」という忠告も受けた。一人っ子である僕にとり、せつかくできた友だちと一緒に渋谷や新宿でバカ騒ぎするのも正直言つて楽しかったから、アメリカ留学という冒険には、胸を張つて出発できなかったのである。

そんな心理状態で臨んだミネソタ州ノースフィールドのカールトン・カレッジには、やはりそれ相当の困難が待ちかまえていた。とくに初めのうちは授業の予習復習で毎週末を棒にふつてしまったし、最初の冬学期には精神的なスランプにも陥った。友だちづくりにも苦労したし、僕が外国人だからといって対等に扱ってもらえないことも幾度かあった。ノースフィールドは東京と違ってなんでも手に入る環境ではない。雑誌が二―三週間遅れて来ることはざらだし、映画館では見る気にもならないR級映画しか上映していない。ろくな食事もない。勝手のわからない環境に放りこまれた僕は、カールトンから逃げだしたい、と思ったことがたびたびあった。

しかし、そうこうしているうちに、はや二年が経った。慶応時代の友人たちは就職活動を始

め、僕もようやくカールトンで落ち着いた。時間が経つのは早い、しかしまだ先は長い。一生懸命頑張っている、と自分を励ましている。

留学は確かにとても楽しいし、新鮮な経験でもある。しかし、同時に強い精神力と根気が要求される。時間を上手に使わないと授業にはついていけなくなるし、語学力も自然に伸びるものではない。日々努力を積み重ね、生活の術を身につけることによって、はじめて実りのある留学が成し遂げられると今は考えるようになった。すこし大げさになるかもしれないが、留学とは環境を変えることではなく、むしろ新たな自分とのたまたかいなのだ。これから留学しようと考えている人は、このことを念頭に置く必要があると思う。

アメリカから父宛に手紙を書き始めたのは二年半前のことである。それからの一年間でこんなに書くとは思ってもみなかったのだ、目の前に積み上がった原稿を手にして内心びっくりしている。いろんなことを経験したんだなあ、と読みかえしてみると少し懐しい気持ちにもなった。今までの中でもっとも充実した一年だったのではないか、とさえ思う。

現在のアメリカを垣間見た僕と、五〇年代からアメリカを見続けている父とのこのささやかな往復書簡が、これから留学を考えている方々やその両親、アメリカに興味を持たれている人々のお役に立てば、こんなに嬉しいことはない。

一九九三年十二月三十一日（カールトン・カレッジへ戻る前日）

北村 洋

ただいまアメリカ留学中・目次

まえがき 1

第一信

慶応大学を中退してアメリカ留学

一九九一年七月二日 洋より父へ

10

一九九一年七月二七日 父より洋へ

16

第二信

能力を引き出すアメリカの大学教育

一九九一年八月二日 洋より父へ

18

一九九一年八月七日 父より洋へ

23

第三信

ドラッグ・カルチャーとビーチ・パーティ

一九九一年八月五日 洋より父へ

25

一九九一年八月二日 父より洋へ

30

第四 信

一九九一年八月二三日 洋より父へ

35

コー・カレッジの授業と週末のプログラム

第五 信

一九九一年八月二〇日 洋より父へ

42

多民族国家の素顔が見えるバス旅行

一九九一年八月二五日 父より洋へ

49

第六 信

一九九一年九月二日 洋より父へ

57

グレイハウンド・バスの今昔

一九九一年九月一二日 父より洋へ

65

第七 信

一九九一年九月二三日 洋より父へ

72

カールトンのカリキュラムと大学食堂

一九九一年九月二八日 父より洋へ

80

第八信

一九九一年一〇月四日 洋より父へ

86

村田駐米大使の講演と日本の国際貢献

一九九一年一〇月一〇日 父より洋へ

90

第九信

一九九一年一〇月一九日 洋より父へ

96

個性重視のアメリカ式ピアノ・レッスン

一九九一年一〇月三〇日 父より洋へ

101

第一〇信

一九九一年一〇月三一日 洋より父へ

105

カーバー教授の「アメリカ西部の文学」

一九九一年十一月一〇日 父より洋へ

111

第二一信

一九九一年十一月二五日 洋より父へ

117

韓国系の友人と語りあつた人種問題

一九九一年十一月二日 父より洋へ

123

第二二信

零下一〇度の地でのホームシック

一九九二年二月八日 洋より父へ

125

一九九二年二月二五日 父より洋へ

132

第二三信

冬学期終了、逃げるようにニューヨークへ

一九九二年三月二七日 洋より父へ

138

一九九二年四月五日 父より洋へ

149

第二四信

死に対する日米の考え方の違い

一九九二年四月一九日 洋より父へ

157

一九九二年四月二六日 父より洋へ

164

第二五信

ロサンゼルス暴動とカールトンの学生集会

一九九二年五月二五日 洋より父へ

171

一九九二年五月二〇日 父より洋へ

184

第二六信

一九九二年六月九日 洋より父へ

194

日米の学校スポーツ比較考

第二七信

一九九二年六月一日 洋より父へ

201

やつと見えてきた日本と日本人

あとがき

208

ただいまアメリカ留学中

—— 息子と父の往復書簡

慶応大学を中退してアメリカ留学

「とうとうアメリカに着いた！」

という実感が初めて湧いてきたのは飛行機がシカゴ・オヘア空港に着陸した瞬間ではなく、そのあとバスに揺られながらコー・カレッジへ向かっているときでした。窓から見える空はさわやかに晴れわたり、とうもろこし畑が視野いっぱいに広がっています。映画「フィールド・オブ・ドリームズ」の中ではアイオワのとうもろこし畑がスクリーンいっぱいに映じられますが、あの風景を実際の当たりにすると、なにやら景色に吸いこまれていくような錯覚に襲われます。どの方角に目をやっても地平線がはつきり見えるこの雄大な風景には圧倒されます。住宅が密集し、ワンルーム・マンションに押しこめられ、地価高騰と騒がれる日本の都会では、まず見るこ

とのできない景観です。

「本当にアメリカに着いた！」

新天地に到着した今、僕は体内を駆けめぐる興奮を抑さえられません。はやくアメリカ生活を始めたい。

とはいっても、同時にかなり不安でもあります。はたして僕はアメリカでやっていけるのでしょうか。そして、生まれ育った日本を離れてアメリカの大学に来たことは正解なのでしょう。正直なところ、僕は自分のこれからの想像すると樂觀的にはなりがたく、むしろ五里霧中というのが本音です。とくに、日本で名声を誇る慶応義塾大学の籍を捨てるのは非常に残念な気がします。生活は快適でしたし、卒業すればさほど苦もなく安定した職に就けるはずなので、わざわざ将来を保証されたコースを断ち切る必要もない、と思うことが今でもあります。友人もたくさんできていたので、彼らから遠ざかるのもとても寂しいと思います。

しかし、日本の大学にこのままとどまっていると、僕は結局自分に負けてしまう気がします。僕にとって、慶応の生活環境はあまりに居心地がよすぎます。授業は“楽勝科目”を選んで履修していれば卒業は難しくはありませんし、籍を置くだけで学歴にも箔が付きます。慶大生だという周囲からは仰々しく褒められ、僕の人生は順風満帆だと勝手に思いこまれます。たしかに慶応は優秀な大学であり、人がこぞって賞賛するのにも一理あります。

でも、立派な経歴をもっているから幸せで豊かだと見られるのは少しおかしいのではないか。僕は慶応での大学生活を振りかえってみると、とても楽しかったけれども決して幸せでも豊かで

もなかったと思う。僕は慶応に合格した瞬間から、これで四年間は安泰だという一種の安心感に浸ってしまい、知らないうちに気をゆるめてしまいました。だから勉強からは遠ざかってしまい、娯楽に娯楽にと無意識のうちに流されてしまったのです。もちろん、勉強を怠けるのは自分の意志の弱さから来るものであるから、つまるところ責任は僕自身にあります。

ですが、見ていると遊びにふけてしまうのは僕一人どころか、多くの学生に見られる現象です。日本の大学生は勉強しない、という現実はかなり知られていますが、まったくそのとおりだと思えます。せっかく熾烈な受験戦争をくぐり抜けてきたのに、授業には出ないでサークル、アルバイト、コンパ。テスト前には他人のノートをコピーしたり、ひどい場合はカンニングさえします。進んで本を読む人はほんの一部に絞られます。皮肉にも、受験勉強に明け暮れた高校時代のほうがはるかにフェアで、かつ充実していました。大学生活の現実を経験してみても、僕はなにか拍子抜けしてしまいました。

さらに僕は学校のシステムにも幻滅させられました。たとえば、クラスの規模が大きすぎて出欠がどうなっているのかもはっきりしない授業や、黒板の文字もはっきり見えないほど大きな教室。藤沢キャンパスはまだましなほうですが、先生に個人的になかなか会えない。授業形態も先生の一方的な講義ばかり。履修科目数が多いのでそのどれにも集中できない。勝手な言い方かもしれませんが、大学の授業ではあまり刺激を受けられません。聞いた話ですが、毎時間自分の講義ノートを黒板に写すだけ、といういかげんな先生もいるそうです。こんな張りのない環境に四年間身を置くなんで、自分は何をしているのだろうかと思ってしまう。

むろん、有名な大学にいるというのは環境が安定している証明ですし、それは非常に贅沢なことでもあります。しかし、安定しているがために目標ももたず、漫然とした生活に甘んじてしまうのは危険なことです。ダスティン・ホフマンは「卒業」という映画で、エリートコースを堅実に歩んだものの、将来の指針がわからずに空虚な毎日を送る役を演じましたが、この架空の人物が銀幕を飛び出してそこから散在するとなると、それは問題です。社会が貧しくなります。僕もこんな人間になってしまふのが恐いのです。

ことわっておきたいのですが、この手紙の中で僕は「自分（人間）」とは何か」という哲学的な問いかけをしているわけではありません。自己のオントロジー（存在）というテーマはあまりに複雑で、未熟な僕には納得のいく答など出せないからです。かわりに僕は今、

「自分（人間）はいつたい何をすべきか」

という人生の意義を考えています。人間は社会の中で共存しているのだから、この問のほうが生産的だし、実りのある答が出せるように思います。ただ、この問も非常に難しい。たとえば、「あなたは生きていく上で、いつたい何をすべきと思っていますか？」

と質問すると、

「社会貢献」

という返事がよくかえってきます。そうすると、僕らは反射的に、

「ああ、なるほどね、それはいいですね」

と簡単に納得してしまいます。社会貢献という言葉は一見自明なことにように感じてしまう

し、響きも良いからです。しかし、よくよく考えてみると、このやりとりは非常に表面的なものです。まず社会貢献とは具体的にどういう意味なのかはつきりしていません。大会社に入れば企業人として社会に尽くすことができる、といえるかもしれませんが、そんな人たちはみな皆、社会貢献をしたいがために就職を決意するのでしょうか。社会を“豊か”にしなくてはならないという義務感から、社会人になろうと思うのでしょうか。それよりも、結局は自分が快適な人生を送れるように、一番条件のよい会社を選ぶ人がほとんどなのではないでしょうか。本当の社会貢献とは各人が積極的に社会に尽くそう、という意志がなくては始まりません。会社に入れば社会貢献をしていることになるという、消極的な態度には問題があると思うし、結果的に貢献しているからといって、それをいかにも自分のモットーであるかのように誇示することもおかしい。

では、僕はいったい何をすべきだと考えているのか。これまで御託を並べてきたと思われるかもしれませんが、肝心の僕には納得のいく人生目標は、まだまとまっていません。ですが、とうよりも、だから僕は自分について考える時間が欲しいのです。常に疑問をもてるような人間になりたい。でないと社会に対する考えは深まらないし、将来の選択肢も狭くなります。僕がアメリカに來ようと決意したのは、今の状態で日本にとどまっていると、僕は会社に従属する平凡な社会人に終る危険が大きいと思ったからです。このままでは、いい企業に入ることにはしのぎを削り、立身出世のためにすべてを犠牲にするという、“豊かさ”とは無縁の生活に終始してしまうようないやな予感があるのです。もちろん、会社は現代社会には不可欠な要素なので、僕はその存在を否定したり、就職は“悪”だと決めつけているわけではありません。しかし、このまま四